

【執筆者の紹介】

大正九年二月十七日 富山県西砺波郡西五位村土屋に生まれる

昭和十三年三月 富山県立高岡商業学校卒業

昭和十六年二月十日 敦賀歩兵第百十九連隊に入

営

昭和二十年八月 敦化第十六野戦兵器廠で終

戦

昭和二十年十月 シベリア、タイシエツト抑

留

昭和二十二年十一月 復員し、北陸配電会社に復

職

昭和五十年二月 北陸電力会社を停年退職

平成元年七月 訪ソ墓参 沿海州地方

平成四年八月 訪ソ墓参 タイシエツト地

方

平成十七年三月 富山県慰霊碑建立実行委員

(富山県 山田 秀三)

抑留記

福井県 岩本 栄一

はじめに

もう帰国してから六十年もたちますので忘れた事ばかりで申訳ありませんが、記憶している事を綴ってみました。お許し願います。

昭和十九(一九四四)年一月十九日入隊

広島のある学校で身体検査を受けて即日帰郷でない者は武装一式をもらい、夜行列車で出発した。検査に合格しない者は我が故里へ帰って行った。

非常の事故、夜広島から船に乗って釜山港に着いた。酷寒の零下二五度の風雪の中を汽車は佳木斯に着いた。富錦まで二百キロの所を今度はトラックに乗り、顔の眉毛や髭に霜が付き白く凍って、素手で手すりや飯盒を持つと飯盒の持ち手が凍って手にひっついてくる。

入隊は満州六一三部隊野砲隊で、ソ連との国境

近くで松花江の近くの富錦という町である。富錦の部隊の者は我々の入隊を祝ってご馳走をして迎えてくれた。六カ月の教育を終えて一期の検閲を野砲隊の二番砲手として受けた。

それから間もなく衛生兵の命令が出た。同年兵は一期の検閲を終えて日曜日は外出をしていたが、我々はまた六カ月の衛生の教育を受けた。衛生兵の教育はまた一入厳しく、帯革(皮のベルト)やスリッパで両ビンタを叩かれ、一週間ぐらい両頬が紫になって腫れ上がった。

野砲隊は馬六頭を引っぱる部隊で、兵隊の飯より先に馬に飯を与え手入れをし馬の運動をして帰り、それから兵隊は飯を食べた。

衛生兵の教育が終わって六一三部隊二中隊へ帰って隊付衛生兵として勤務した。

ソ連が参戦するののか、我々は方正の方へ築城作業に行った。

八月〇日か、日本が負けたと言う噂があった。誰も戦争に負けた事は信じなかった。富錦の本隊

はソ連の爆撃にやられ方正の方へ向ったが、昼は隠れ夜は行軍して途中砲弾にやられ、自決する者も出て、方正へ来たのはわずか四、五人ぐらいだったか。そのうちにソ連兵が来て、そこで我々は武装解除を受けた。武装解除を受ける前に銃や武器を畑の中へ埋めたが、ソ連はこの部隊ではこのくらいの武器ではない、どこかへ隠したのだろうと言つて聞き入れないので、また掘り戻して出した。

十月に入り、ウラジオを経由して日本へ帰るのだからと言つて松花江から船に乗せられた。部隊長以下千人ほどの者が船に乗った。ハバロフスクへ着いたら船から降ろされて汽車に乗せられた。見るからに古臭い貨物列車で二段式になっていて、寝るところは馬にやる敷き藁の様な物が敷いてあった。

これはシベリア鉄道で秘密鉄道で、これに乗ってウラジオへ行くのかという話が出た。

そしてのろのろと走って一昼夜、降ろされた所

は山の中で人間の身長ほどの草が生い茂った所だった。その中に兵舎みたいな建物があり、その草を刈りその兵舎に入れられた。

話によると、もとドイツの捕虜が居た兵舎だそう、兵舎の周りは鉄条網が張りめぐらされて四つ角には望楼が建っていて、小銃を持ったロスケが見張りをしている。そんな中で十一月三日頃か、日本の宮城に向って遙拝をした。

ここはドルミンという所らしい。

そこに一カ月居た頃か、山へ仕事に行くようになり、二人引きの鋸と斧を持ち、雪の中を山へ行き松の大木を伐採する作業であった。厳寒の中食糧は少なく、パン一切れに汁は飯盒の中蓋に八分目ほどで、それが一食であった。たまにコウリヤンの飯が出ると量が少し多かったので少し腹ごたえがあった。馬の食糧であったらしい。松の大木を倒すと先の方に大きな松笠が有り、その中に内地でいうカヤの実のような実がたくさんあった。それはうまく、そして油気もあり栄養もあり、我々

「す」と言って診察をした。

熱のない者は皆、明日は作業に出せと言って帰った。実際のところ栄養失調の者はあまり熱がないので休ませておいた患者を作業に出した。実のところ体力がないのと寒さで、山奥で大鋸を持ったまま雪の上で死んでいる者が何人か出た。これはいけないと思い、重症の患者はロシア軍医に伝えて入院をさせた。

ある日の事、朝点呼の際、十五、六人の者が来ていないので、どうしたのかと尋ねたら、隣に寝ていた者もいつ死んだか分からない、寝る時はいつもと変わらず話なんかしていた。そこで何か変わった事はないか、何か変わった物を食べたか色々と尋ねてみたら、セリを食ったと言う。食糧は少ないし身体も疲労をしているので内地にあるようなセリと違って食べたのだろう。調べてみるとそれは毒セリらしく、早速外にも食べた者はいないか調べて、食べた者には下剤を与えて命を取り止めた。その日の朝死んだ者は十六人ほどであ

のような身体の衰弱した者にとって貴重な食物であった。松の木を倒す度に走って松の実を拾いに行った。

民主化運動

そんな抑留生活をしている間に将校達は我々兵隊と区別してどこかの地へ行った。

そんな時、民主化運動が活発になり、我々の部隊も部隊長を選挙で選んだ。初年兵の若い林という者が選ばれた。私は軍医も居ないので衛生兵でありながら医務室の長として選ばれた。

毎日夜になると身体の都合の悪い者が診察に来た。身体の悪い者は全部休ませていた。そんな時ロシアの軍医が聴診器を持って来て、これで診察をせよと置いて行った。私はその聴診器を使って診察をした。診察をして、ごく悪い者は作業を休ませた。栄養失調の者も休ませた。大した事のない者へは薬を与えて明日は作業というようにしていた。ある日、ロシアの軍医が来て「おい岩本、患者が多すぎる。全部患者を集める。私が診察を

った。

千人もいると色々な職を持った者もいる。お寺の住職もいたので懇ろにお経を上げてもらい近くの山へ埋めた。

また葉もないし、軍医の見放した患者も看護で助ける外はなかった。肺炎で熱は出るし汗は出て、着物は濡れる。洗濯をして乾かして着替えさせ、自分の着ているシャツも患者に与えて看護で治した者もいた。

滋賀県の井上準一郎さんという方で、軍隊では自分の戦友でもあった。帰ってから手紙をもらったが、「ここに居られるのは岩本のお陰だ」とお礼の手紙であった。

環境も悪く夜は暗いので白樺の皮が良く燃える。内地でいう松の薪のような物で、それを焚いて明りを求めていたが煤がきつく、着ている物も荷物も煤で黒くなり大変だった。

また虱も多く湧き、着ている衣類は一面虱と卵でいっぱい、栄養も足りないところを虱に食わ

れ身体がぼろぼろになって、暇さえあれば虱取りをしていた。十日ぐらいに一回、衣類を蒸して虱を死なせてくれた。

二年ほど山中において、ノルマ・ベストラ(早く)、ノルマ・ベストラと使われていたが、ちよつと町らしいクラスナヤレーチカという所へ下りてレンガ工場の仕事をした。

たまに馬鈴薯掘りの使役に行ったが帰りに三個か四個持つて帰り、それがあまりにもうまかった。缶詰の蓋に釘で穴を明け、その裏をオロシ板の代わりにして芋をすりおろし飯盒に入れいっばいにして、岩塩を入れて煮て飲んだ。一個の芋を七回ぐらいに分けて食べた。

年月もたつて六十年にもなるので大分忘れた事ばかりですが、ナホトカ港から舞鶴港へ着いたのがその年の最終便だそうで、海は荒れて船の中は皆船酔いにあい、あっちへこっちへとごろごろしていた。もうちよつと荒れたら運航止めになるところだったそうです。

本君の話聞く。私の兄もいたところで懐かしくて紹介しました。

(福井県 佐々木 清左夫)

ソ連でのひもじい生活で、内地へ帰っても、どんなひもじい生活でも誰にも負けないと強い気持ちで帰った。

二十三年十二月一日帰宅

帰宅後、区長、農家組合長、農協の監事、農協の理事、今立町議会議員二期、副議長をしてやめた。町の特産里芋組合長は今年で二十三年務める。

【執筆者の紹介】

ソ満国境の黒龍江のほとりに富錦市が在りますが、鉄道もないところです。ヂャムスより飛行機で行かなくてはならない僻地です。僕の兄貴は農事合作社(日本農協)で理事長をしていましたのでその話をしてくれましたので、富錦の苦労話を聞いてあつたのです。

岩本君は六一三部隊の富錦より遠い道を何日もかかって、百五十人一かたまりにてヂャムスへ歩いての逃亡の苦労を聞いて、着いた時は二十人ぐらいで、途中死んでいった兵隊を思い出して、岩

臨時召集抑留の記

福井県 白崎 峯 男

昭和十五(一九四〇)年、徴兵検査第二乙合格、第一補充兵となりました。昭和十七年七月、臨時召集により福井銀行栗田部支店勤務中、浜松市追分中部七二部隊尻隊高射砲隊に入隊。通信教育を受け毎日厳しい訓練でした。

昭和十七年十二月、同年兵もビルマ行と満州行に分かれ、私は満州行の命を受け一泊、家に帰る事が許され、浜松駅から列車で六時間かかり武生駅に到着しました。南越線が大雪のため不通なので家まで歩いて帰りました。翌日浜松の部隊へ戻りました。

十二月十九日浜松を出発、軍用列車で下関駅へ着きました。釜山へ連絡船で。玄界灘が荒れ船酔いで横に転がり吐く者が多く、生きた心地がしませんでした。約十時間余りの船旅でした。